文革を封印する中国
――『文革を生きた一知識人の回想』に寄せて

China to Seal the Cultural Revolution ;
In Connection with *The Reminiscences of An Intellectual who Lived during the Period of the Cultural Revolution*

小　林　路　義＊
Michiyoshi KOBAYASHI

昭和 40 年前後，NHK のラジオ放送に夕方 5 分位の英語ニュースの時間があって，時々それを聴くことがあった．昭和 41(1966)年のある日(修士コースの時だった)，その英語ニュースを聴いていて，「北京でハイティーンの生徒達がどうこうした」というニュースがあって，その「ハイティーンが」というところを今も鮮明に覚えている．「どうこうした」というのは話を省略したのではなく，内容を聴き取ることができなかったからで，何が起きたかは全く解らなかったが，なぜか妙にその「ハイティーンが」というところだけ，後々まで記憶に残ったのである．

文革の年表を繰ってみると，中国の「ハイティーンズ」が最初に紅衛兵を名乗ったのは清華大学附属中学生(日本では高校生に当る)で昭和 41(1966)年 5 月 29 日であるが，この時は数名の秘密裏の結成だから，行動を起したのは，それからしばらく経ってからということになる．紅衛兵こそ文化大革命(正式には「プロレタリア文化大革命」)を大衆運動へ転化させた前半期の張本人だから，文化大革命はこの時に始り，昭和 51(1976)年 10 月 6 日の「四人組」逮捕を以て終結したということになる．中国史上にも人類史上にもあり得ない，というか，あってはならない「武闘，迫害，冤罪」の暴虐の 10 年は，しかし，必ずしもこの 10 年のみを世界共産党史上の例外とする訳にはいかない. 人民中国建国後に限っても，この前には「反右派闘争」(1957 年 6 月～1958 年前半，犠牲者は 55 万人)，「大躍進政策」(1958～61 年)の大失政(楊継縄『鄧小平時代』は 59 年から 61 年までの間に，餓死者最大 4 千万人という数字を上げている [1])があり，暴虐の 10 年もこれらの延長上にあるからである．この間，と言っても，人生の大半を，黒五類として烙印をおされた個人や家族が一体どのようにして生き延びてきたのかは，想像に余りある．黒五類とは「階級の敵」として社会主義社会の最下層におかれた地主，富農，反革命分子，右派分子のレッテ

＊本学名誉教授，国際関係論(International Relations)

ルを貼られた個人とその家族である．これらは個人檔案として記録・保存され，しかも自分自身の檔案は閲覧不可能である．共産主義とは階級をなくす政治制度ではなく，新たな階級を作り，しかも徹底してそれを存続させる政治制度なのである．

黒五類とされた著者

本書[2]の著者朱沢秉(Zhu Zébing，1947～)が右派分子とされたのは，その父朱沛人(Zhu Pèirén，1915～1977)が中国国民党の機関誌『中央日報』の副総編集長だったこと[3](一旦，歴史反革命罪で2年半の保護観察処分を受ける)，更に民営新聞『大公報』の記者となり「大鳴大放」欄の責任者だったばかりか，自身も同紙に文章を書いたからである．逮捕されたのは1958年3月6日，朱沢秉が小学4年のときだった．これより朱一家は黒五類として，著者の言葉によれば，「犬っころ」として様々な差別を受け続けることになるのである．本書の原題は『狗崽子雑記』であるが，「狗崽子」(gou zaizi)は「犬っころ」とか「ろくでなし」という意味である．狗崽子が本書のキー・ワードになっている．

黒五類としての生活がどんなものであるかの一端を本書から引用してみるが，その前に，父が逮捕されて釈放の当てもなく獄中(強制労働)にある以上，一家の生活は成立たないのだから，子供達も含めて一家は離散するしかないことを予め言っておく必要がある．それが長年月に亘ってどのような経過をたどったかは本書を見て戴くしかない．著者朱沢秉が一人北京に戻って母との生活をしていた頃(小学5年から高校の頃，文革以前)の記述は，黒五類の扱われ方の一端を示している．「同じように窓ガラスを割っても，出身のよい者は不注意で，うっかりした行為とされるのに，もし犬っころがやったとすれば，鬱憤を晴らし，故意に破壊活動をしたと見なされてしまう．同じく口が滑っても，出身の良い者はブルジョアに影響され，騙されたと見なされるのに，犬っころの場合はたちまち階級の立場の問題だとか，反革命の本質問題に発展してしまう．僕は抑圧と屈辱を感じ，学校の圧政的な政治的雰囲気に嫌悪感を覚え，一刻も早く抜け出したい気持だった．僕の心に無数の疑問が渦巻いていた」[4]．

これはまだ文革以前の情勢に過ぎない．文革の初期の頃の話は本書に譲るが，著者の高校卒業が近づいた頃は，丁度「上山下郷」が喧伝され始めた時だった．母が望んでいた大学進学の夢は既に著者は諦めていた．姉の朱沢敏がそれ以前に，個人檔案によって大学進学の資格を剥奪されていたからである(姉は離ればなれの家族を養うため，江西省南昌から西安へ移って働いていた)．学校では「上山下郷」の準備が進んでいたが，中高校生全員が下放される訳ではなかった．それは北京にある工場や製鉄所も人手を必要としていたからである．「けれども，このような機会は紅五類の子弟だけに応募する資格があり，競争に参加できるのだった．黒五類の子弟のたった一つの道は，おとなしく思想改造をうける，

文字通り百パーセント最高指示[5]を執行するだけであった」[6]．紅五類とは，「労働者，貧農，下層中農，革命烈士，革命幹部及び人民解放軍の子弟」のことであるが，革命幹部自身の出身は問われない．黒五類といい，紅五類といい，共産主義社会は，自由主義社会のリベラル知識人の妄想とは違って，徹底した階級社会なのである．

「クラスメートの数人は首都鋼鉄公司に分配された．犬っころたちは心の中でひそかに羨んだだけだった．あとは急ぎ自分の手荷物をまとめて，自らの下放の準備をしたのである．誰でもわかっていた．北京の知識青年の行く先は，ほとんどが黒竜江省，内蒙古自治区といった酷寒の地だった」[7]．唯，多少の選択の余地があって，結局著者は親戚がいる南昌へ行き，南昌の学校から改めて南昌で下放されたのである．多少の選択の余地とは，学校側の決める配属先の他に，自分で行き先と連絡をとるか，故郷へ帰るかの余地があったことを指す．要は，著者が述べているように，「北京から立ち去りさえすれば，それでよかったのだ」[8]．

本書は，第一章「十年間の悪夢」，第二章「苦海に船を漕ぐ」，第三章「一筋の光明」，という構成になっていて，著者朱沢秉（たくへい）の年齢通りの記述になっている．第三章で一筋の光明というのは，下放された農村で臨時教員をちょっとしたことによって，著者の意志とは全く関係なしに，ある下放幹部の一方的配慮によって，撫州師範学校に入学する機会に恵まれたことを指す．1972 年のことだが，翌年には師範学校を卒業して，正式に小中学校の教員となることができた．その後，1977 年に大学入試が再開され大学進学の夢も芽生えたのだが，地方小役人の自己中心的な勝手な裁量によって，大学入試の資格を意図的に剥奪される．結局著者は 2007 年に定年退職するまで，その後の生涯を中学・高校の教師に徹して過すのである．

手記翻訳の経緯

共訳者李青氏が母方の叔父朱沢秉（たくへい）の手記を初めて読んだのは，90 年代後半のことで，その時はまだ第一章しかなかったというから，著者朱沢秉（たくへい）が『狗崽子（くさいし）雑記』を書き始めたのは 90 年代の中頃で，その後第二章第三章を書き足していったのだと思われる．共訳者細井和彦氏が『狗崽子（くさいし）雑記』の存在を知ったのは 2005 年のことだと述べているので，その大部前に完成されていたものと思われる．

朱沢秉（たくへい）『狗崽子（くさいし）雑記』は，全く個人的な手記であって，出版する積りも公表する積りも全くない記録文章である．どんな積りでこの手記を書き残したのかと言えば，共訳者細井和彦氏に語った言葉によれば，「自分史的な手記執筆の動機は，現在の時代に生きる建国後の苦難の歴史を知らない世代，特に未来を担うべき自分の子供たちと親族の次の世代に，朱家の歩みを知らせたかったからなのだ」[9]ということであった．そのことに間違いはない．公にする積りもなく，家族がこっそり読んでくれればよいという態度がその通りだと

いうことを表している．元々本書にもよく記載されている漢詩からも解るように，著者は文章に長けていたから，何でもよい何かを書き残しておきたかったのだろう．唯，そうではあるが，本書の序を読んで，私(小林)はその透徹した見解と冷静な評言のうちに，不当に落しめられた共産主義社会下層の人々の代言になっていることに驚き，且つ敬服の念を禁じ得ないのである．これは迫害された共産党幹部たちの回想記などとは大いに違う点である．それらにはどうしても自己弁護が伴うし，別の面での隠蔽もあるからである．その点，黒五類として生きざるを得なかった本書の著者には，そのような不都合はなく，しかも事態をかくも客観的に見抜く見識には唯々驚かずにはいられない．

だから，共訳者がせめて，これを翻訳して日本で出版しておこうと思ったのも，原文の文章の達意さと共に，そのような優れた客観性を感じ取ったからだろうと思われる．話が前後するがここで，本書の著者と共訳者の関係をきちんと述べておくのも読者の為には役にたつだろうと思われる．というのも，予め本書の部分訳を何度か頂戴して，ある程度解っていた積りの私(小林)でも，今回改めて全編(本文とあとがき)に目を通したとき，時々人と人の関係が解らなくなることがあったからである．共訳者の細井和彦・李青夫妻の李青氏を中心に述べると解り易い．李青氏の母が(先にもちょっと触れた)朱沢敏で，その弟が本書の著者朱沢秉(たくへい)である．朱沢敏，朱沢秉の父が朱沛人(はいじん)で人民中国成立前後『中央日報』や『大公報』のジャーナリストであった．つまり，李青氏から見ると，本書の著者朱沢秉は母方の叔父であり，朱沛人は外祖父ということになる．従って，細井和彦氏があとがきで岳母と言っているのは，朱沢敏で本書の著者朱沢秉の姉である．本書が日本で日本語訳で出版されることになったキー・パーソンは既に故人ではあるが，著者朱沢秉(たくへい)の姉朱沢敏ということになる．

本書はあくまで，公表する積りの全くなかった個人的手記であって，1990 年代に中国大陸で相当数出版された回想記，伝記，ノンフィクションとは趣を異にするが，ここで文革批判関係の大陸における出版事情について一言触れておくのも無駄ではないと思われる．なぜなら，それらには時代によってその時代の意向があり，回想記の著者の立場があるからである．それを踏まえれば，本書が純粋に私的なものであり，それ故の客観性と訴求力の強さが益々はっきりすると思われるからである．

文革批判の出版物[1)]の第一波は 1980 年代である．この時代は改革開放に転換した中央政府の意向を踏まえて，政治的に文革を否定する出版が主流であり，第二波は 1993～1998 年である．第二波においては，個人的な回想記やノンフィクションと著名政治家の家族や秘書が書いた伝記が主流を占める．このことによって，海外では文革研究は大いに進んだ．これらの出版物には二つの流れがあって，文革時代の政治的な意味での回想や伝記と，かなり個人的な意味での回想や記録である[1)]．

第二波について言えば，私自身随分思い切った出版がなされ始めたことに当時驚きを禁

じ得なかったことは事実だが，そうかと言って，文革批判が全く自由になったという訳ではない．文革批判は両刃の剣であって，総体的な批判が可能である筈はないからである．文革自身が余りに多くの問題を抱え過ぎているし，その時代の個人にとっても，加害者であると同時に被害者という二重三重の多面性を整理できないのである．文革時代の記憶と忘却の心理的せめぎ合いの中で，立往生する．それは共産党中央にとっても同じである．かくて文革は封印されるのである．中国において出版は中央と地方の二本立てであるが，当然のことながら，出版は共産党中央の支配下にあり，文革というような敏感な問題について誰でもが出版可能な訳ではない．つまり，上記のように驚くような出版があったとしても，それはあくまでその時の許容の枠内でのことである．

日本語でしか読めない文革出版物

さて，そこで，原文は存在するが，大陸では見ることもアクセスすることもできない，しかし香港や台湾では出版されている，という本が生じる．更に，原文は存在するが，その翻訳のみが英語や日本語で見ることができる，という本が生じる．言うまでもなく，本書は後者である．その上で更に，文革に関して(研究書ではなく第一次文献として)日本で日本語で出版することを前提に書かれた本も出てくる(その場合,原文が中国語の場合もあれば，原文からして日本語の場合もある)．

そういう意味で，日本語が英語と共に示している「言語空間の大きさ」について，私はある本で述べたことがあるのだが[1)],反応が全くないのは誠に残念としか言いようがない．残念ではあるが，それはそれとして，ここではそれも補強する意味で，文革に関して日本で出版された第一次文献と翻訳文献を紹介しておきたい．

最初から日本で日本語でのみ出版されたものとしては，早い機会に次の本がある．

寥志剛『私の体験した文化大革命：四人組の行ったこと・日本に学ぶべきこと』
(村上厚訳)，日新報道，昭和 55 年 10 月．

陳凱歌『私の紅衛兵時代』講談社現代新書，平成 2 年 6 月．

張承志『紅衛兵の時代』岩波新書(新赤版)，平成 4 年 4 月．

後二者に関しては，「紅衛兵感情」を問題にした陳思和が，日本訪問時にこれを見つけ，日本語が読めないことを残念がり，この二冊を読むために日本語を勉強する決心をしたということである[1)]．しかも陳凱歌の『私の紅衛兵時代』は平成 13(2001)年になって，中国語版『少年凱歌』として人民文学出版社から出版されたという[1)]．

次の書は回想記ではないが，基本的文献なので敢えて掲載しておきたい．

楊麗君『文化大革命と中国の社会構造 ― 公民権の配分と集団的暴力行為』
御茶の水書房，平成 15 年 12 月．

これも初めから日本で日本語で書かれたものである．

次の翻訳本は香港で出版された『文革大屠殺』(開放雑誌社，平成 14＜2002＞年 7 月)の翻訳である(私は当時この原本を早い機会に入手していた).

宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺：封印された現代中国の闇を検証』(松田州二訳)，原書房，平成 18 年 1 月.

次の三つは更に貴重な文献で，文革がチベット族とモンゴル族に及した恐ろしい記録である.

ツェリン・オーセル(写真：ツェリン・ドルジェ)『殺劫(シャーチェ)：チベットの文化大革命』(藤野彰・劉燕子訳)，集広社(中国書店発売)，平成 21 年 10 月.

楊海英編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料』(1，2)＜内モンゴル自治区の文化大革命 1，2＞，風響社，平成 21 年 1 月.

楊海英『墓標なき草原 ― 内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上・下)，岩波書店，平成 21 年 12 月.

チベットのものは，台北の大塊文化出版股份有限公司から平成 18(2006)年に出版されたものを，訳者劉燕子氏(日本在住)の必死の尽力によって，日本語で出版されたものである. 著者ツェリン・オーセル氏は現在逮捕こそされていないが，パスポートも発行されず，当局の監視下にある [1]. また，内モンゴルのものは，内モンゴルから日本に留学したモンゴル人の著者が，初めから日本で日本語で出版したものである. いずれも第一級の貴重な文献である.

私(小林)は文革の専門家どころか，現代中国のいかなる専門家でもないが，偶々の記録・メモからでもこれだけの文献をすぐに上げることができる. 他にもまだ色々あるに違いない. 今回また日本語による貴重な文献が加ったことになる. 共訳者夫妻の長年に亘る労を多としたい.

これらを一瞥して，歴史家も政治学者もこれらを捉える枠組を持ち得ないだろうし，それを構築することも出来ないに違いない. 余りに暴虐が限界を超えているからである. 今可能なのはせめて事実を事実として淡々と記述することだけかも知れない. そのように考えるとき，NHK 英語ニュースの「北京でハイティーンが」という英語の響きが歴史の重みを以て今さら乍らに思い出されるのである. あれから実に 44 年の月日が流れた.

註

1) 楊継繩『鄧小平時代』(上・下)は，大陸の中共編訳出版社の 1998 年の出版. 伊藤正『鄧小平秘録』上(産経新聞社，平成 10 年 2 月)，*p.* 251 より引用.

2) 朱沢秉『「文革」を生きた一知識人の回想』(細井和彦・李青訳)，ウェッジ，平成 22 年 2 月.

3) 朱沛人は『中央日報』で孔祥熙・宋子文の汚職蓄財を暴露したのだから(1947 年，朱沛人 32 歳の

とき)，朱沛人が『中央日報』の副総編集長だったからと言って，国民党べったりだった訳ではない．全く逆だった．

4) 本書，*p*. 37.

5) 文革時，毛沢東の発言や指示または論文の一節を「最高指示」と言って，絶対不可侵の指示とされたもの．ここでは「青年知識人は農村へ行き貧農，下農，中農民から再教育を受ける必要がある」という指示を指す．

6) 本書，*p*. 82.

7) 同前．

8) 同前．

9) 本書，*p*. 255.

10) 大陸における文革批判関係の出版物については，福岡愛子『文化大革命の記憶と忘却』（新曜社，平成 20 年 8 月）という詳細な著述があり，全体を俯瞰し易い．

11) 政治的な意味での伝記や回想については，伊藤正『鄧小平秘録』下（産経新聞社，平成10年4月），巻末資料 *pp*.30～36参照．個別の回想や記録については，福岡愛子，前掲書の巻末資料 *pp*. 395～392 参照．

12) 小林路義「日本語の言語空間としての大きさ」，『環太平洋地域における日本語の地位』（国立国語研究所編），凡人社，平成 18 年 3 月．

13) 陳思和の話の原文は，李輝編著『残缺的窓欄板―歴史中的紅衛兵』＜こわれた窓枠―歴史の中の紅衛兵＞（1998 年）．福岡愛子，前掲書，*p*. 138 より引用．

14) 福岡愛子，前掲書，*p*. 349，注（45）．

15)『週刊新潮』平成 21 年 10 月 22 日号．